



県央地域における鶏伝染性喉頭気管炎の発生事例

岩手県中央家畜保健衛生所

令和4年9月、本県では38年ぶりに県北地域の採卵育成農場で鶏伝染性喉頭気管炎(ILTV)が発生(Vol.17に掲載)、それ以降近隣の農場で5件続発し、大きな損失となりました。

その後、落ち着いたかにも見えたが、令和5年4月、県央地域の採卵鶏農場において、本病が発生し、翌月には同系列の農場で続発が確認されました。

ILTVウイルス(ILTV)は発症鶏の体内で増殖し、血痰のほか、糞便中にも持続的に排泄されることから、発生農場では、続発を防止するためにも適切な鶏糞処理と確実なワクチン接種による他鶏舎及び他農場への伝播防止対策を徹底することが非常に重要です。

1 発生状況

令和5年4月、県央地域において約36万羽を飼養する採卵鶏農場の10鶏舎中1鶏舎で、556日齢の採卵鶏が奇声を示して衰弱、死亡羽数が増加(100羽前後/日)しました。当該農場では、県北地域での発生事例を受けて昨年から育成期にILTV生ワクチンを接種していましたが、発生鶏舎の鶏群は未接種でした。発生から約20日後に当該鶏舎では沈静化しましたが、その間に他の2鶏舎でも同様の症状と死亡羽数の増加が認められ、翌月には、当該農場から約2km離れた系列の採卵鶏農場において、死亡羽数の増加(50羽前後/日)が認められました。なお、育成期に適正な方法でワクチン接種された3鶏舎では、死亡羽数の増加は認められませんでした。

2 検査成績

剖検により、本病に特徴的な気管内の血痰(図1)及びチーズ様物の貯留が見られました。組織学的に、粘膜上皮細胞の合胞体と核内封入体(図2)が観察されました。ウイルス検査により、気管からILTV遺伝子が検出、またはILTVが分離されました。ILTV遺伝子解析により、昨年度、県北地域で検出されたウイルスとは異なる野外株であることがわかりました。また、続発した2鶏舎及び系列農場由来の死亡鶏の気管からもILTV遺伝子が検出されました。

3 考察

当該農場は育成期のワクチン接種を開始していましたが、発生鶏群は接種前であり、ILTVに対する免疫がなかったことが発生要因と考えられました。また、続発した2鶏舎及び系列農場でも発生後にワクチンが接種されましたが、労力・コスト削減のため、点眼接種ではなく簡易的な散霧による接種が実施されており、蔓延は防止できませんでした。これらの鶏舎・農場で検出されたILTVも、初発鶏舎で検出されたウイルスと近縁の株であり、何らかの要因(作業着、飼養管理資機材、野生動物等)で病原体が拡散したものと考えられました。本病発症鶏は主要な感染源である血痰のほか、糞便中にもILTVが継続的(約1か月間の報告がある)に排泄されます。当該農場においても、発生があった3鶏舎の集糞ベルト由来の糞便や共同堆肥舎由来の堆肥からILTV遺伝子が検出されており、これらを介したILTVの鶏舎間及び農場間の伝播が考えられました。

4 対策

発生農場では、点眼による確実なワクチン接種や消毒(鶏舎内外、死鳥置場及び堆肥置場)等により、ILTV量を低減させるとともに、続発による損失を防止するため、鶏舎毎の作業着・長靴の交換の徹底、ネット・金網等の設置による野生動物侵入防止対策を徹底し、糞便等によるILTVの伝播を未然に防ぐことが重要です。

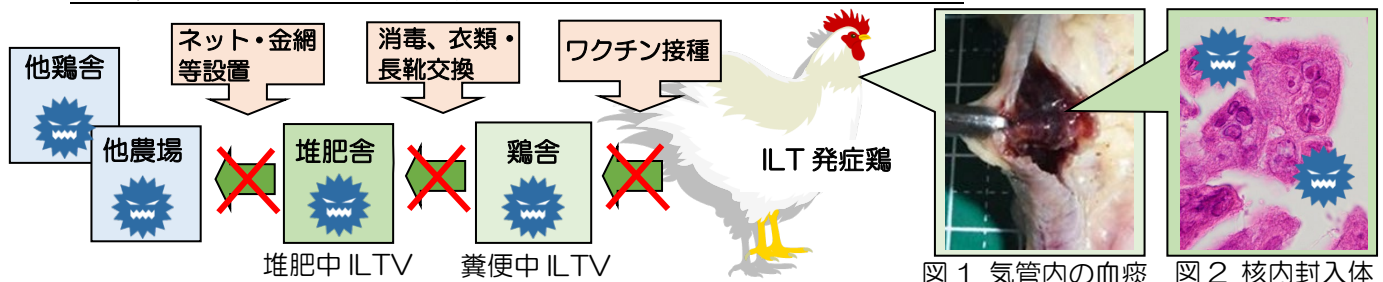


図1 気管内の血痰 図2 核内封入体

※「病性鑑定通信」は、当所で実施している病性鑑定から、今後の診断の参考になる症例、注意喚起等が必要な情報等をまとめたものです。

なお、中央家保ホームページには、過去の記事も掲載しています。

「病性鑑定通信」へのリンクは↓こちら↓です。または、「岩手県中央家畜保健衛生所 病性鑑定通信」で検索してください。

<https://www.pref.iwate.jp/sangyoukoyou/nougyou/desaki/chuuou/1008059/1047433/index.html>